

アカイカ 北太平洋

(Neon Flying Squid, *Ommastrephes bartramii*)



最近一年間の動き

日本沖合の冬春生まれ群を対象とする 2013 年の冬いか漁（1～3 月）は、加入量は比較的多いと予測されていたが、冬季の漁場が形成されず、2 年続けての不漁となった。一方、北太平洋中央部における大型の秋生まれ群と小型の冬春生まれ群を対象とした 2013 年の夏いか漁（5～8 月）は約 3,600 トンで、2012 年の漁獲量（約 5,400 トン）に比べて 6 割に低下した。2013 年の流し網調査による秋生まれ群の資源豊度は、前年よりも 1 割増加したと推定された。また、同様の流し網調査による冬春生まれ群の資源豊度は、2012 年に比べて 47%と減少した。

利用・用途

大型のアカイカは肉厚で柔らかく、美味である。内臓・足皮を除去して冷凍ロールイカ、惣菜、さきいか、燻製、イカ天ぷら等の加工原料になる。

漁業の概要

1970 年代初頭に激減したスルメイカ漁獲を補うために、1974 年頃から三陸・道東沖合でアカイカ釣り漁業が始まり、1977 年には最高漁獲量（12 万トン）をあげた。一方、流し網漁業は 1978 年に三陸・道東沖で始まったが、アカイカ釣り漁業と競合したため、1979 年から東経 170 度以西を釣り漁場、以東を流し網漁場とする規制が実施された。その後、釣り漁業は縮小したが、流し網漁業は 1980 年代には毎年 12～22 万トンを供給する重要な漁業となり、韓国と台湾も参入した（図 1）。しかし、公海域における流し網漁業は、国連決議により 1992 年末をもってモラトリアム（操業停止）となった。

流し網が禁止になった 1993 年以降、アカイカの強い需要を反映して日本近海でアカイカ釣り漁業が復活し、1994 及び 1995 年にはともに約 7 万トンを漁獲した。東経 170 度以東の旧流し網漁場においても、いか釣り漁船が出漁するようになり、1995 年以降 0.2～2 万トンを漁獲して重要度が増している。東経 170 度以西の漁業の主体は中型いか釣り漁業である。1994～1998 年は 6 万トン以上の漁獲量を示したが、

資源が急減した 1999 年以降は 1～3 万トンまで漁獲量が減少した。最近では漁業の主力である中型いか釣り船の減少及びスルメイカ等との兼業もあり漁獲量は多くない。

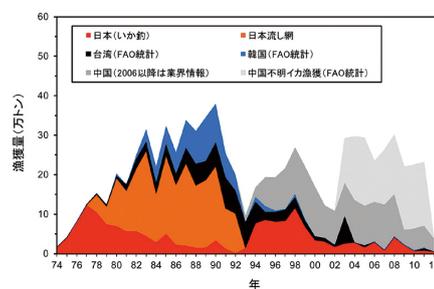


図 1. 北太平洋アカイカ国別漁獲量。中国の漁獲量は、Chen *et al.* (2008a) による冬春生まれ群のアカイカ漁獲量とした（2006 年以降は漁業情報からの推定値）。また、FAO (2013) における中国による北太平洋の不明イカ漁獲量の 50% をアカイカ漁獲と見なした場合の値を■で示した。台湾および韓国のアカイカ漁獲量は、FAO (2013) の統計値における北太平洋におけるその他のイカの値をアカイカと見なした。

近年、中国や台湾の釣り漁船が我が国 200 海里付近でアカイカを漁獲しており、中国船の隻数は 1996 年には年間約 350 隻、その後は約 400～600 隻に増加した（一井 2002）。しかし、その後、資源水準の低下に伴い出漁隻数はやや減少した。中国現地での聞き取り調査などから、ここ数年は 150～250 隻程度が出漁していると考えられる。これらの外国船による漁獲は、1995～2005 年には 8～11 月にかけて冬春生まれ群を対象に 7～13 万トンが報告（Chen *et al.* 2008a）されている一方で、秋生まれ群を対象とする漁獲量の報告は全くない。Chen *et al.* (2008a) の報告による 1998～2002 年までのアカイカ漁獲量と FAO 統計の同期間における北東太平洋の不明イカ漁獲量は、ほぼ完全に一致している。しかし、FAO 統計における中国の北東太平洋における不明イカ漁獲量は、2003 年以降にそれまでの 10 万トンレベルから 50 万トンレベルへと急増した。この値をただちにそのままアカイカの漁獲量と考えるには過大推計であるが、5～8 月頃に漁獲対象となる未報告の秋生まれ群の漁獲を含めると、中国漁船によるアカイカ漁獲量は Chen *et al.* (2008a) の報告では過小推計と考えられる。また、漁業が行われている台湾や

韓国漁船の集計もアカイカとしての記載がなく、FAO 統計に示される集計海域（北太平洋中央部など）や頭足類の仕分け名（種々のイカ、普通のイカなど）から推測するしかない状況にある。

生物学的特性

アカイカは外洋性種で、季節的な南北回遊を行う。漁業が行われている北太平洋では、産卵場は日本（南西諸島～小笠原諸島）や米国（ハワイ諸島）の 200 海里水域を含む表面水温 21～25℃ の範囲の亜熱帯海域であり、索餌場は亜寒帯境界～移行領域である（図 2）（村田 1990、村田・中村 1998、谷津 1992）。北太平洋における系群は、発生時期、外套長組成、稚仔の分布及び寄生虫相により、秋生まれ中部系群、秋生まれ東部系群、冬春生まれ西部系群及び冬春生まれ中東部系群の 4 系群に分けられる（谷津ほか 1998、長澤ほか 1998）ただし、秋生まれの中部系群と東部系群は、流し網 CPUE の経年変化が酷似しており、同一系群である可能性がある。

寿命は 1 年で、最大外套長は雌で 60 cm、雄で 45 cm 程度であり（図 3 左、Yatsu *et al.* 2000）、秋生まれ群が大型となる。成長は発生時期や海域により異なるが、雌は生後 6 か月程度で外套長 30 cm になり生後約 10 か月で成熟に達する（表 1）。ふ化稚仔は表層に分布し、表面水温に依存した指数関数的な成長をする（図 3 右、酒井ほか 2004）。最近報告された粒子追跡実験によるシミュレーション研究によると、アカイカ秋生まれ群のふ化稚仔がふ化してから 1 か月間に経験

する水温は冬春生まれ群のふ化稚仔が経験する水温よりも 1.0℃ 高いことが示された（Kato *et al.* 印刷中）。上述した水温依存の初期成長を考慮すると、この 1.0℃ の環境水温の差は、秋生まれ群と冬春生まれ群との間に大きな成長の違いを生じさせることを示唆する。

アカイカは、後述するように餌生物の日周鉛直移動と密接に関わる明瞭な日周鉛直移動を行う。秋生まれ群は春から夏にかけて索餌しながら北上回遊し、秋以降は南下回遊して産卵場に達するが、いずれも昼間は 300～600 m、夜間は 0～50 m の水深を回遊する（図 4A～C）（酒井ほか 2006）。一方、冬春生まれ群は冬季漁場において夜間は表層を回遊し、昼間は上述の秋生まれ群よりも浅く 120 m 程度である（図 4D）（酒井・加藤 2011）。

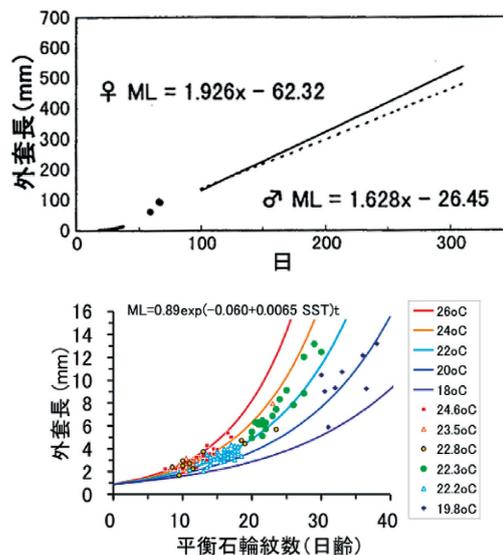


図 3. アカイカの成長曲線 (左) 親の成長 (Yatsu 2000)、(右) 生息する表面水温に依存する稚仔期の成長曲線 (酒井ほか 2004)

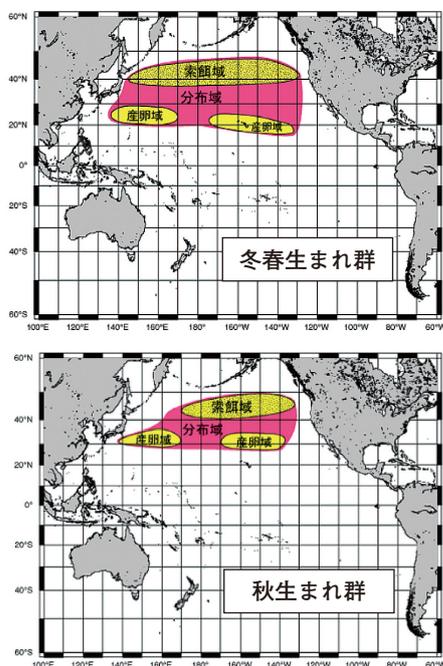


図 2. アカイカ冬春生まれ群と秋生まれ群の分布と回遊 (漁場は索餌域に形成される)

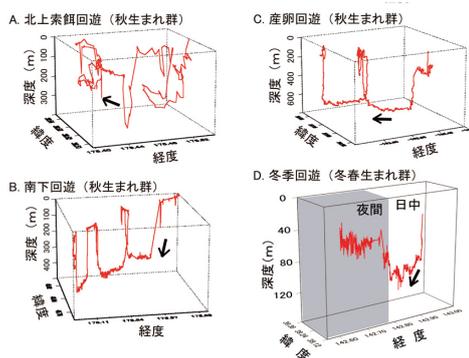


図 4. アカイカに超音波発信器 (Pinger) を付けたバイオテレメトリ手法によるイカの日周鉛直行動 (酒井ほか 2006、酒井・加藤 2011)

表 1. アカイカの成熟外套長と最大外套長 (谷津ほか 1998)

	雄	雌
成熟外套長 (生後 7～10 ヶ月)	30～35 cm	40～45 cm
最大外套長 (生後 1 年)	45 cm	60 cm

春季の北上回遊や夏季の索餌場でのアカイカは、ハダカイワシ類を中心とする魚類、頭足類、甲殻類等を捕食しており、特に前 2 者が主要な餌生物となっている (Seki 1993、有元・河村 1998、保正ほか 2000、Watanabe *et al.* 2004)。これらの餌生物は、昼間は 300 ~ 600 m、夜間は 0 ~ 50 m の水深を日周鉛直移動すると考えられる。一方、アカイカの捕食者として代表的なものはメカジキである (Seki 1993)。

資源状態

【秋生まれ中部系群及び秋生まれ東部系群】

1992 年末の公海流し網の停止以降、旧流し網漁場における盛漁期 (7 月) のアカイカ流し網調査の資源量指数 (10 反当たりの捕獲尾数、CPUE) は、1 年間の時間遅れを伴って約 6 倍に増加した (図 5 の黒丸実線)。これは、流し網漁業 (年間 10 ~ 18 万トンの漁獲圧があった) により低下していた資源が、流し網の停止により急速に回復したと示唆されている (Yatsu *et al.* 2000)。しかし、1997 年に一度水準が低下し、1998 年に高水準に復活したものの、1999 年に再び低水準となり、これが 2003 年まで続いた。2008 年に漁獲は増加したが、それ以降 2011 年まで減少傾向が見られ、大きな変動が繰り返されている。秋生まれ群の流し網全盛期 1982 ~ 1992 年における 7 月の資源量は、商業流し網データと調査流し網データを用いて 3 つの方法で推定され、いずれの方法でも類似した推定値 (33 ~ 38 万トン) が得られた (Ichii *et al.* 2006)。

北太平洋中央部において大型の秋生まれ群と小型の冬春生まれ群を対象としたいか釣り漁業による 2013 年の夏漁 (5 ~ 8 月) の漁獲量は約 3,600 トンで、2012 年の漁獲量 (約 5,400 トン) に比べて 6 割に低下した。漁業と独立した調査では、2001 ~ 2013 年までの 13 年間のアカイカ流し網調査による秋生まれ群の平均 CPUE (10 反当たりの漁獲尾数) は 9.2 であり、2013 年の CPUE は 3.9 であり平均より低かった。また、この 13 年の CPUE を過去の最低値と最高値の差を 3 等分し、低位、中位、高位と水準分けすると、2013 年は低位に相当する。一方、ここ 5 年間の CPUE で見ると、2009 年 (22.2)、2010 年 (1.1)、2011 年 (0.1)、2012 年 (3.6)、2013 年 (3.9) となり、2009 年から資源は低位で不安定な状態にあると見られる。

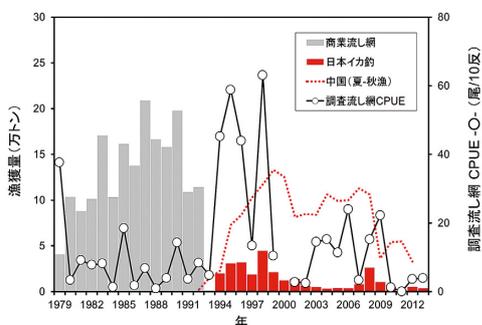


図 5. 東経 170 度以東のアカイカ秋生まれ群の我が国の漁獲量 (2013 年までの全漁連集計より) と調査流し網 CPUE (10 反当たりの採集尾数) の経年変化 (1999 年までの調査流し網データは北海道大学の北星丸による) 及び中国の漁獲量 (2006 年以降は漁業情報からの推計値)

【冬春生まれ西部系群】

本系群は東経 170 度以西に分布し、釣り漁業の主対象となっている。1970 年代後半には 10 万トン以上の漁獲をあげていたが、その後 1990 年初めにかけて、我が国の漁獲量及び調査船の CPUE (尾 / 台 / 時間) は低下している (図 6)。この原因として、①過大な漁獲量 (日本の釣り漁業による 10 万トン以上の漁獲量 + 韓国・台湾及び東経 170 度以西での我が国の流し網による漁獲量) 及び②環境収容力の低下 (親潮域の寒冷化による動物プランクトン現存量の減少; Nagasawa 2001) の可能性が考えられる。

いか釣り調査の平均 CPUE によると、最近の日本近海におけるアカイカの資源変動は下記の通りである。流し網が行われていた期間を含む 1979 ~ 1993 年までの平均 CPUE は低水準 (0.7 ~ 9.4) であった (図 6)。その後、1994 ~ 1998 年までの平均 CPUE は 1996 年を除いて高水準 (10.9 ~ 14.9) が続いた。しかし、1999 年は顕著に低下し、2000 年を除いて 2002 年まで低水準 (0.5 ~ 3.9) であった。そして、2004 年前後に高い水準を示したが、その後、調査船の CPUE は調査が終了する 2007 年まで変動しながら徐々に低下している傾向が見られ、過剰漁獲の影響も示唆される。

現存量についてはいくつかの推定値があるが、不確実性が大きく、信頼性のある値は得られていない。まず、1984 ~ 1988 年夏季の千島列島南部水域において、夜間の灯火観測点で実施された目視調査では、アカイカの平均密度が 337 ~ 1,172 尾 / km² と推定されている (スロボッコイ 1990)。アカイカの平均体重を 500 g とし、この密度を東経 170 度以西の西部北太平洋に引き伸ばすと、14 ~ 40 万トンとなる。また、村田・嶋津 (1982) は DeLury 法により、1979 年の西部北太平洋 (冬春生まれ群) の初期資源量の推定値を最大 2 億 8 千万尾 (体重 500 g とし 14 万トン) と見積もった。ある時点における現存量と初期資源量は単純には比較できないが、両者は数十万トンと概ね一致している。一方、1983 ~ 1995 年の北緯 40 ~ 45 度、東経 140 ~ 165 度の西部北太平洋において、表中層トロールにより、アカイカ現存量が推定されており (Belayev and Ivanov 1999)、その結果を東経 170 度以西に引き伸ばすと、105 ~ 300 万トンとなる。ただし、表中層トロール調査の場合、現存量の推定値は漁獲効率 (曳網した海水中に分布する生物のうち漁獲される割合) の仮定値に大きく影響される。

三陸沖合のアカイカ冬春生まれ群を対象とする冬漁では、2001 ~ 2013 年の漁獲量の平均値は 1.0 万トンであった。2013 年は 2012 年と同様に漁獲量は極めて低くわずか 90 トンであり、2 年連続の不漁となった。漁獲量から見た資源状態は極めて低い水準であった (図 6)。冬漁の水揚げは 2008 年に 15,600 トン、2009 年に 11,332 トンを記録して以降、2013 年まで減少傾向にあり資源の悪化が懸念される。これらのアカイカは、夏から秋にかけて黒潮北上暖水や三陸沖・釧路沖暖水渦を利用して北上索餌回遊 (為石 2002) を行う間に、北西太平洋での中国を中心とする外国船による漁獲圧にさらされる。このため、日本漁船の漁獲は、外国船の漁獲による影響とともに、漁場形成に関係する海洋構造や漁場探

索能力に左右される。したがって、必ずしも冬漁の漁獲量が資源水準を表す指標とはならない。2006 年から本資源を対象として始めた調査流し網による加入量調査では、2007～2013 年までの平均 CPUE (10 反あたりの採集尾数) は 25.7 であり、2013 年の CPUE は 12.9 と見積もられ、2012 年の値 (27.3) の 47% に減少した。調査流し網 CPUE で見ると 2010 年以降の加入量は 2012 年まで増加傾向にあったが、2013 年には減少した (図 6)。このように、加入量調査の評価と実際の漁獲量の水準には大きな差が見られた。本稿では、調査流し網の実施とその解析が始まって間もなく、更なるデータの蓄積が必要であることから、資源の動向は漁獲量水準に依拠して減少傾向とした。

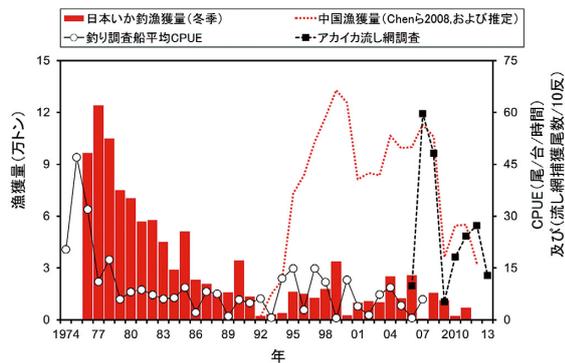


図 6. 東経 170 度以西の我が国のアカイカ冬春生まれ群の漁獲量 (全漁連集計 1～3 月の水揚量から原魚換算) と調査船 CPUE (尾/釣り機台数/時間) の経年変化 (2007 年を最後にそれ以降の調査はなくなった)、調査流し網 CPUE (東経 144 度及び 155 度における 10 反あたりの採集尾数) による加入量予測値及び中国の漁獲量 (2006 年以降は漁業情報からの推計値)

管理方策

本種の管理方策については現時点では確立されていないが、これまでにいくつかの管理方策に向けた報告が行われている。

北太平洋公海におけるアカイカを含む国際的な漁業資源に関する議論が進められている。2006 年から我が国のほか、米国、韓国、ロシア、カナダ、中国、台湾が参加し、サンマ、クサカリツボダイ及びアカイカ等の資源の長期的な保存及び持続可能な利用を確保することを目的とした北太平洋漁業委員会 (NPFC) を設立するための交渉が行われ、2012 年 2 月に条約が採択された (水産庁 2013)。その後、同委員会の運営に必要な事項が準備会合で検討されるなど条約の発効に向けた準備が進められている。

北太平洋ではこれまで中国船籍と見られるいか釣り漁船が公海で禁止されている流し網を積載し使用したとの疑いや (NPFC Annual report 2009)、米国沿岸警備隊による中国漁船の拿捕などが発生している (Alaska Report 2007)。また、外国漁船によって日本のいか釣り漁船の操業が妨げられる事態も発生してきた (黄金崎 2002)。日本漁船の場合は、始めに魚群を見つけた漁船が優先して、後続の漁船は 3 マイルの船間距離をおくなど操業ルールを作っているが、中国などの外国船にはこのようなルールはなく、過密や割り込み、集魚

灯点灯状態での至近距離通過など、危険を伴う無謀な操業が行われてきた。同条約が発効されれば、資源管理だけでなく、操業ルールなどの適切な漁業管理も考慮された持続的な資源利用が徹底されると期待される。

執筆者

外洋資源ユニット

いか・さんまサブユニット

東北区水産研究所 資源海洋部

浮魚・いか資源グループ

酒井 光夫・若林 敏江・加藤 慶樹

参考文献

- Alaska Report. 2007. Coast Guard intercepts Chinese vessels suspected of driftnet fishing, October 3, 2007. http://alaskareport.com/news1007/z46743_illegal_fishing.htm (2010 年 10 月 26 日)
- 有元康司・河村章人. 1998. 中部北太平洋アカイカ釣り好漁場における餌魚類特性. *In* 遠洋水産研究所 (編), 平成 8 年度イカ類資源研究会議報告. 遠洋水産研究所, 静岡. 70-80 pp.
- Belayev, V. A. and A. N. Ivanov. 1999. Dynamic processes in the fish community of the North-west Pacific. *In* M. Terazaki, K. Ohtani, T. Sugimoto and Y. Watanabe (eds.), Ecosystem dynamics of the Kuroshio-Oyashio Transition Region. Proc. Int. Mar. Sci. Symp., August 1998. 179-193 pp.
- Bograd, S.J., D.G. Foley, F.B. Schwing, C. Wilson, R.M. Laurs, J.J. Polovina, E.A. Howell and R.E. Brainard. 2004. On the seasonal and interannual migrations of the transition zone chlorophyll front. *Geophys. Res. Lett.*, 31: L17204
- Chen, X., B.Liu and Y.Chen, 2008a. A review of the development of Chinese distant-water squid jigging fisheries. *Fish. Res.* 89: 221-230.
- Chen, X.J., Y. Chen, S. Tian, B. Liu and W. Qian. 2008b. An assessment of the west winter-spring cohort of neon flying squid (*Ommastrephes bartramii*) in the Northwest Pacific Ocean. *Fish. Res.* 92: 211-221.
- FAO. 2013. Capture production 1950-2011. Download dataset for FAO FishStat Plus, also published in FAO Yearbook, Fishery Statistics, Capture Production 2011, <ftp://ftp.fao.org/fi/stat/windows/fishplus/capdet.zip> (2013 年 10 月 26 日)
- 保正竜成・渡邊 光・窪寺恒己・馬場徳寿・一井太郎・川口弘一. 2000. 西部北太平洋移行領域及び移行帯における高次捕食者の食性分析結果. *In* 日本エヌ・ユー・エス株式会社 (編), 平成 11 年度複数種一括管理方式検討基礎調査委託事業報告書. 日本エヌ・ユー・エス株式会社, 東京. 16-38 pp.
- 一井太郎. 2002. 北太平洋海域. *In* 奈須敬二・奥谷喬司・小倉通男 (共編), イカ-その生物から消費まで- (三訂版). 成山堂書店, 東京. 195-209 pp.

- Ichii, T., K. Mahapatra, H. Okamura and Y. Okada. 2006. Stock assessment of the autumn cohort of neon flying squid (*Ommastrephes bartramii*) in the North Pacific based on past large-scale high seas driftnet fishery data. *Fish. Res.* 78: 286-297.
- Kato, Y., M. Sakai, M. Masujima, M. Okazaki, H. Igarashi, S. Masuda, and T. Awaji. (in press). Effects of hydrographic conditions on the transport of neon flying squid *Ommastrephes bartramii* larvae in the North Pacific Ocean. *Hidrobiológica*.
- 黄金崎栄一. 2002. 北太平洋でアカイカ操業を行う外国船の状況. 平成 12 年度 イカ類資源研究会議報, 88-91.
- 村田 守. 1990. 北太平洋におけるいか流し網漁場の海洋環境及びアカイカの分布・回遊. 日本海ブロック試験研究集録, 17: 144-148.
- 村田 守・中村好和. 1998. 北太平洋におけるアカイカの季節的回遊および日周鉛直移動. *In* 奥谷喬司 (編), 外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウム講演集. 海洋水産資源開発センター, 東京. 11-28 pp.
- 村田 守・嶋津靖彦. 1982. 北西太平洋におけるアカイカの資源特性値について. 北海道区水産研究所研究報告, 47: 1-10.
- Nagasawa, K. 2001. Long-term changes in climate and ocean environment in the Okhotsk Sea and western North Pacific and abundance and body weight of East Sakhalin pink salmon (*Oncorhynchus gorbuscha*). *N. Pac. Anad. Fish Comm. Bull.*, (2): 203-211.
- 長澤和也・森 純太・岡村 寛. 1998. 北太平洋のアカイカ系群の生物学的指標としての寄生虫. *In* 奥谷喬司 (編), 外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウム講演集. 海洋水産資源開発センター, 東京. 47-62 pp.
- NPFC Annual Report. <http://www.npafc.org/new/publications/Annual%20Report/2009/Introduction/home.htm> (2011/0210)
- 酒井光夫・岡村寛・一井太郎. 2004. ハワイ諸島北方海域におけるアカイカ秋生まれ群稚仔の死亡率について. 平成 15 年度イカ類資源研究会議報告, 35-48pp.
- 酒井光夫・一井太郎・田中博之. 2006. Pinger 追跡によるアカイカ科イカ類の行動 - アカイカの 3 次元空間行動パターンと今後の課題. 日本バイオロギング研究会 第 2 回シンポジウム 2006 (要旨), p19-20.
- 酒井光夫・加藤慶樹. 2011. アカイカの回遊行動調査. *In* 淡路敏之 (編), 平成 22 年度報告書「文部科学省 気候変動適応研究推進プログラム 気候変動に伴う水産資源・海況変動予測技術の革新と実用化」. 独立行政法人海洋研究開発機構地球情報研究センター, p.77-81
- 酒井光夫・若林敏江・岡崎誠・加藤慶樹. 2011. LC ネット・表中層トロールで採集されたアカイカおよびその他の頭足類. 平成 21 年度国際資源調査等推進事業「北太平洋冬季アカイカ若齢加入量調査報告」, 73-79, 水産庁
- Seki, M.P. 1993. The role of neon flying squid, *Ommastrephes bartramii*, in the North Pacific pelagic food web. *Bull. Int. N. Pac. Fish. Comm.*, 53: 207-215.
- 水産庁 2013. 北太平洋漁業委員会 (NPFC) の事務局設置都市について. <http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/kokusai/130913.html>
- スロボッコイ・イエ・ヴィ. 1990. 1989 年 8 ~ 9 月の南千島水域におけるアカイカの数量評価と分布. *In* 水産庁 (編), 日ソ漁業協定及び地先沖合協定に基づく第 21 回サンマ, マサバ, マイワシ, イカ, スケトウダラ及びニシン協同研究会議 (日ソ漁業専門家・科学者会議) 経過報告. 水産庁, 東京. 249-252 pp.
- 為石日出生. 2002. 漁場形成機構. *In* 奈須敬二・奥谷喬司・小倉通男 (共編), イカ - その生物から消費まで - (三訂版). 成山堂書店, 東京. 195.85-122 pp.
- 上野康弘・酒井光夫. 2010. 日本近海の有力な未利用資源 - サンマ・アカイカ -. *In* 上野康弘・熊沢泰生・稲田博史 (共編), 新しい漁業のデザイン 沖合漁業の問題とその改善. 水産学シリーズ 163, 恒星社厚生閣, 東京. 42-64
- Watanabe, H., T. Kubodera, T. Ichii and S. Kawahara. 2004. Feeding habits of neon flying squid *Ommastrephes bartramii* in the transitional region of the central North Pacific. *Mar. Ecol. Prog. Ser.* 266: 173-184.
- 谷津明彦. 1992. 北太平洋における釣り調査によるアカイカの分布 (1976-1983 年). 遠洋水産研究所研究報告, 29: 13-37. <http://www.enyo.affrc.go.jp/bulletin/kenpoupdf/kenpou29-13.pdf> (2006 年 12 月 6 日)
- Yatsu, A. 2000. Age estimation of four oceanic squids, *Ommastrephes bartamii*, *Dosidicus gigas*, *Stenoteuthis oualaniensis*, and *Illex argentinus* (Cephalopoda, Ommastrephidae) based on statolith microstructure. *Jpn. Agri. Res. Quart.*, 34: 75-80.
- 谷津明彦・田中博之・森 純太. 1998. 北太平洋におけるアカイカ *Ommastrephes bartramii* の資源構造. *In* 奥谷喬司 (編), 外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウム講演集. 海洋水産資源開発センター, 東京. 29-46 pp.
- Yatsu, A., T. Watanabe, J. Mori, K. Nagasawa, Y. Ishida, T. Meguro, Y. Kamei and Y. Sakurai. 2000. Interannual variability in stock abundance of the neon flying squid, *Ommastrephes bartramii*, in the North Pacific Ocean during 1979-1998:

アカイカ（北太平洋）の資源の現況（要約表）

資源水準	低位（秋生まれ群、冬春生まれ西部系群）
資源動向	不安定（秋生まれ群）・減少傾向（冬春生まれ西部系群）
世界の漁獲量 （最近5年間）	7.4～13.7万トン 平均：10.0万トン（2007～2011年） （中国の不明イカを除くFAO統計及び漁業情報からの推計）
我が国の漁獲量 （最近5年間）	0.7～4.2万トン 平均：1.7万トン（2008～2012年） （全漁連水揚げ統計の原魚換算）
管理目標	MSY：15.9万トン（秋生まれ群） 相対逃避率40%：10万トン（冬春生まれ西部系群）
資源の状態	低位（秋生まれ群）・低位（冬春生まれ西部系群）
管理措置	大規模流し網禁止（国連決議）
管理機関・関係機関	北太平洋漁業委員会（NPFC） （設立準備中）